

秦野市弘法山公園において 2006 年から 2008 年までに観察された鳥類

吉田 裕樹・石川 康裕・佐藤 友哉・馬場 好一郎・藤吉 正明

Yuki Yoshida, Yasuhiro Ishikawa, Yuya Sato, Kouichiro Baba
and Masaaki Fujiyoshi: Notes on Wild Birds Observed
at Koboyama-Park, Hadano from 2006 to 2008

はじめに

弘法山公園は、秦野市の東部に位置し、標高 200m 程度の弘法山、権現山、浅間山を含む面積約 20ha の森林公園である。公園内には、ソメイヨシノが数千本植栽されており、3 月末から 4 月初旬にかけては花見客で賑わう。植生環境としては、主にコナラやクヌギなどの落葉広葉樹の雑木林が優占するが、一部にスギとヒノキの常緑針葉樹の植林地、ミカンやクリなどの果樹園、および羊の放牧のための草地なども存在している。また、公園内の権現山山頂には、展望台やバードサンクチュアリと呼ばれる水場が設置されており、秦野市の景勝地や探鳥地として親しまれている。

弘法山公園の地理的な特徴としては、秦野市北部の丹沢山塊と大磯・渋沢丘陵とを結ぶ緑の回廊（コリドー）としての役割を果たしていること、秦野市の市街地と接していることが挙げられる。そのため、弘法山公園では市街地および住宅地に生息する鳥類と、自然度の高い環境を好む鳥類とが同時に確認される可能性があるため、多様な種類の鳥類が観察されることが推測される。

本研究では、弘法山公園の鳥類相やそれらの季節変化を明らかにすることを目的とし、2006 年から 2008 年の 3 年間に於いて鳥類の観察を実施した。

方 法

調査は、2006 年 1 月から 2008 年 12 月までの 3 年間実施した。調査は、基本的に毎月 1 日行い、1 日あたりの調査回数は午前 6 時 30 分から午後 13 時 30 分からの計 2 回とした。ただし、2007 年 2 月から 2008 年 2 月の期間のみ毎月 2 日の調査を実施したため、期間中の合計調査回数は 49 回となった。観察記録としては、午前と午後の計 2 回の記録を 1 日分の結果とした。調査方法は、ルートセンサス法で行い、1 回あたりの観察時間は 2 時間程度とした。

調査経路は、弘法山公園の浅間山山頂を始点とし、権現山山頂、馬場道を通り、弘法山山頂の釈迦堂で折り返

した。その後、馬場道、男坂、車道を通り、浅間山駐車場を終点とした（図 1）。距離は、約 3 キロ程度である。

記録範囲は、道両脇の半径 25m 以内とし、目視または鳴き声で同定できた種を記録した。野外での種の同定には野鳥図鑑（叶内ほか、1998）を用い、学名の記載は日本鳥類目録改訂第 6 版（日本鳥学会、2000）に従った。本調査では、3 年間で記録した鳥を以下の基準で留鳥、夏鳥、冬鳥、旅鳥・迷鳥の 4 つのグループに分けた。その基準としては、ほぼ年間を通して確認されかつ記録された月数が 5 月以上のグループを留鳥、主に 4 月から 9 月の暖かい期間に確認されかつ記録された月数が 3 月以上のグループを夏鳥、主に 10 月から 4 月の寒い期間に確認されかつ記録された月数が 3 月以上のグループを冬鳥、観察時期が不定期または、記録された月数が 2 月以下の稀な種を旅鳥・迷鳥とした。

結果および考察

2006 年 1 月から 2008 年 12 月までの計 49 回の調査において、26 科 62 種の鳥類が確認された（表 1）。確認された種をグループ別に分けると、留鳥は 19 種、夏



図 1. 弘法山公園における調査経路。国土地理院数値地図 25000 を改図。

表 1. 2006 年から 2008 年において弘法山公園で確認された鳥類

タイプ	種名	学名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
留鳥	トビ	<i>Milvus migrans</i>	○	○	○	○			◎			○		○
	キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	●	◎	●	◎		○			◎	●	●	●
	ヒメアマツバメ	<i>Apus affinis</i>	○	○	◎			○			◎	○	◎	○
	アオゲラ	<i>Picus awokera</i>	○	◎	●		○	○		○	◎	○		○
	アカゲラ	<i>Dendrocopos major</i>	◎	◎	○	○	◎	○	◎	○	◎	○	○	
	コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	ウグイス	<i>Cettia diphone</i>	◎	◎	◎	●	●	●	●	◎			○	○
	エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	●	●	●	●	●	◎	●	●	●	●	●	●
	ヤマガラ	<i>Parus varius</i>	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	◎	◎	◎	○
	シジュウカラ	<i>Parus major</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	メジロ	<i>Zosterops japonicus</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	◎	●	◎	○	◎	◎	○		◎			○
	カワラヒワ	<i>Carduelis sinica</i>	◎	◎	◎	○		◎			◎		◎	◎
	スズメ	<i>Passer montanus</i>		○			◎	●	●	◎				
	ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>	●	◎	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	●	◎	●	◎	●	●	●	●	●	●	●	●
	コジュケイ	<i>Bambusicola thoracica</i>	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○		○		
	ガビチョウ	<i>Garrulax canorus</i>	○	◎	◎	◎	●	●	◎	●	●	◎	◎	
夏鳥	ホトトギス	<i>Cuculus Poliocephalus</i>					○	●	◎	○				
	ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>				◎	◎	●	●	◎	◎			
	イワツバメ	<i>Delichon urbica</i>				○	○	◎	○					
	ヤブサメ	<i>Urosphena squameiceps</i>				◎	○	○	○					
	キビタキ	<i>Ficedula narcissina</i>				◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		
	オオルリ	<i>Cyanoptila cyanomelana</i>				◎	○	○						
	イカル	<i>Eophona personata</i>				◎	●		◎	◎				
	ムクドリ	<i>Sturnus cineraceus</i>					●		○	○				
冬鳥	オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>									○			○
	ビンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i>		○	○	●						○	○	◎
	モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	◎	●	◎	○					●	●	●	○
	ジョウビタキ	<i>Phoenicurus aureoreus</i>	◎	●	●	○						○	◎	◎
	トラツグミ	<i>Zoothera dauma</i>	○	◎	●									○
	シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>	◎	◎	●	●							●	●
	ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>	●	○	●	◎							●	●
	ヒガラ	<i>Parus ater</i>		○	○								○	
	アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>	●	◎	◎	◎						○	●	●
	ウソ	<i>Pyrrhula pyrrhula</i>	◎	◎	◎								○	◎
	シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	◎	●	●	●	○					◎	◎	◎
	カケス	<i>Garrulus glandarius</i>	○	○	○	○						○	○	○
旅鳥 ・ 迷鳥	ノスリ	<i>Buteo buteo</i>			○	○								
	サシバ	<i>Butastur indicus</i>					○				○			
	キジ	<i>Phasianus colchicus</i>			○									
	カクコウ	<i>Cuculus canorus</i>									○			
	ツツドリ	<i>Cuculus saturatus</i>					○						○	
	キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>												○
	ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>									○	○		
	サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i>									○			
	ヒレンジャク	<i>Bombycilla japonica</i>			○									
	ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus</i>	◎	○										
	アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i>				●								
	センダイムシクイ	<i>Phylloscopus coronatus</i>						○			○			
	サメビタキ	<i>Muscicapa sibirica</i>									○			
	エゾビタキ	<i>Muscicapa griseisticta</i>									●	◎		
	コサメビタキ	<i>Muscicapa dauurica</i>									◎	○		
	サンコウチョウ	<i>Terpsiphone atrocaudata</i>									○			
	カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>		○	○									
	アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i>										○		
	マヒワ	<i>Carduelis spinus</i>				○								
	オオマシコ	<i>Carpodacus roseus</i>		○	○									
	コムクドリ	<i>Sturnus philippensis</i>				○	○							
	ドバト	<i>Columba livia</i>								○		○		
	ソウシチョウ	<i>Leiothrix lutea</i>	○											
調査日数			4	5	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
2006年 確認種数			17	16	18	18	15	15	17	15	16	16	18	17
2007年 確認種数			20	30	32	30	24	23	22	16	26	19	23	21
2008年 確認種数			21	17	21	19	16	17	12	11	19	20	16	20
合計種数			29	33	35	34	27	24	24	20	28	27	25	27
平均種数			19.3	21	23.7	22.3	18.3	18.3	17	14	20.3	18.3	19	19.3

表中の印は 3 年間の各月における確認頻度を示す。○：3 年間で 1 回確認；◎：3 年間で 2 回確認；●：3 年間で 3 回以上確認。

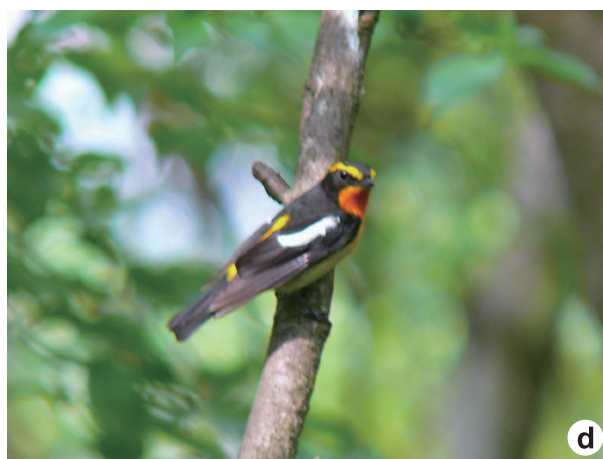
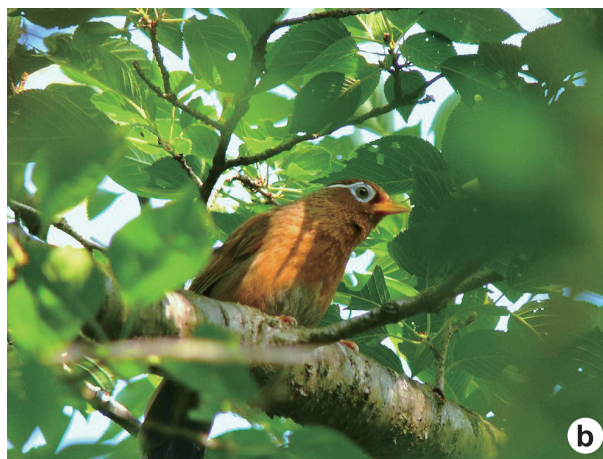


図2. 調査において確認された鳥類。a: ヒヨドリ; b: ガビチョウ; c: ホトトギス; d: キビタキ; e: ウソ; f: カケス; g: ヒレンジャク; h: オオマシコ。

鳥は 8 種、冬鳥は 12 種、旅鳥・迷鳥は 23 種であった。

留鳥は、調査期間においてほとんどの種が月数 8 月以上の高頻度で記録されたが、中でもコゲラやヒヨドリ (図 2a)、エナガ、シジュウカラ、メジロ、ハシブトガラス、ハシボソガラスの 7 種はすべての月において観察され、かつほとんどの月で 3 回以上確認されたため、弘法山公園における通年の優占的な種であるといえる (表 1)。また、このグループには、外来生物法で特定外来生物 (環境省, 2009) に指定されているガビチョウ (図 2b) が含まれていた。この種は、中国から愛玩用として日本へ持ち込まれ、近年関東も含めた温暖な地域へ分布を拡大している (川上, 2002; Kawakami & Yamaguchi, 2004)。

夏鳥は、ホトトギス (図 2c) やツバメ、イワツバメ、ヤブサメ、キビタキ (図 2d)、オオルリ、イカル、ムクドリが確認された (表 1)。本調査では、関東において一般的に留鳥として知られているムクドリがこのグループに含まれていた。

冬鳥として月数 5 月以上の高頻度で記録された種は、ビンズイやモズ、ジョウビタキ、シロハラ、ツグミ、アオジ、ウソ (図 2e)、シメ、カケス (図 2f) であった (表 1)。このグループには、関東で留鳥もしくは漂鳥として知られているオオタカやモズ、アオジ、カケスが含まれていた。

旅鳥・迷鳥は、すべてのグループの中で記録された種数が最も多かった (表 1)。このグループの特徴は、一般的に留鳥として知られているキジやハクセキレイ、ドバト、夏鳥として知られているノスリやサシバ、カッコウ、ツツドリ、サンショウクイ、センダイムシクイ、サンコウチョウ、コムクドリ、冬鳥として知られているヒレンジャク (図 2g) やアカハラ、カシラダカ、アトリ、マヒワ、オオマシコ (図 2h)、漂鳥として知られているルリビタキやソウシチョウなど、渡り区分の異なる鳥類が含まれていた。結果として、それらの鳥類が調査期間において低頻度で記録されたため、このグループに含まれたと推測される。この中には、神奈川県において絶滅危惧や稀少種に指定されているノスリやサシバ、サンショウクイ、センダイムシクイ、サンコウチョウ (加藤ほか, 2006) が含まれていた。神奈川県において記録の少ない種であるオオマシコ (図 2h) も確認することができた。日本野鳥の会神奈川支部 (2007) では、本種は神奈川県において冬鳥として稀に見ることができ、年により渡来数には差があることが記載されている。本調査においても、本種は 2007 年 2 月と 3 月の計 2 回確認されたのみであった。また、このグループには、ガビチョウ同様、特定外来生物に指定されているソウシチョウも含まれていた (環境省, 2009)。

年間を通して確認された合計種数を比較すると、12 月から 4 月にかけて種数が多い傾向が見られ、中でも 3 月が最も多く 35 種であった (表 1)。この傾向は、神奈川県内の台地から丘陵地において行われた他の調査においても報告されている (浜口, 1996; 久良岐探鳥グループ, 1994;

竹内, 1997)。これは、この時期に留鳥と冬鳥が確認されていることに加え、各月に旅鳥・迷鳥が 2～5 種ほど記録されていることによると思われる。一方、6 月から 8 月は種数が少なくなる傾向が見られ、中でも 8 月が最も少なく 20 種であった。これは、この地域に夏鳥として渡来する種が冬鳥に比べて少ないこと、この時期に旅鳥・迷鳥がほとんど確認されていないことが原因であると思われる。特に、8 月は留鳥のうち比較的確認頻度の高いキジバトやホオジロ、7 月までに確認されていたヤブサメなどの夏鳥が確認できず、確認種数が下がったものと思われる。また、9 月には、確認種数の増加が見られた。これは、夏鳥が 8 月よりも減少するものの、留鳥の存在に加え、モズやシメなどの冬鳥が渡来し始めること、サメビタキやエゾビタキなどの旅鳥・迷鳥が他の月よりも数多く観察されていることによると思われる。

年毎の変化を見てみると、2006 年は 5 月、6 月および 8 月の確認種数が 15 種と少なく、一方 3 月、4 月および 11 月の確認種数は 18 種と多かった (図 3)。2006 年の特徴としては、他の年と比較して確認種数の最大値と最小値の幅が小さかった。この要因としては、1 年を通して旅鳥・迷鳥の確認数が各月あたり数種であり、他の年に比べて少なかったことによると思われる。2007 年は、8 月の確認種数が 16 種と少なく、3 月が最も多く 32 種であり、その差は 2 倍であった。これは、留鳥の確認種数は両月ともほぼ同じであったが、8 月に確認された夏鳥よりも 3 月に確認された冬鳥の種数が多かったこと、旅鳥・迷鳥の確認種数が 3 月に突出していたことによると思われる。また、2007 年は、多くの月において他の年よりも確認された種数は多かった。これは、この年だけ調査を月 2 回行ったため、そのことが調査の精度を高め、確認種数の増加につながったのかもしれない。2008 年は、他の年と同様に 8 月の確認種数が少なく、1 月と 3 月の確認種数が多かった。8 月の確認種数は、3 年間を通して最も少ない値であった。

3 年間の調査を通して、本調査地では、3 年間で 3 回以上、かつ年 1 月以上確認された種を高頻度で調査地域を利用している種と仮定すると、これらは留鳥 19 種、夏鳥 8 種、冬鳥 10 種、旅鳥・迷鳥 2 種の合計 39 種であった。それらに加えて、本調査地では、主に旅鳥・迷鳥の渡来により、確認種数が 23 種増加した。これらの種は、確認された回数が 3 年間で数回と低かったため、これらの多くの旅鳥・迷鳥にとって、本調査地は定期的な渡来地ではない可能性が高い。また、確認された鳥類を生息環境別にみると、住宅地や市街地などの人工物の多い環境を好む種は、代表的な種としてキジバトやツバメ、ヒヨドリ、ジョウビタキ、シジュウカラ、メジロ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバトなどが確認された。一方、自然度の高い環境を好む種は、代表的な種としてカッコウやサンショウクイ、ルリビタキ、センダイムシクイ、オオルリ、サメビタキ、エゾビタキ、コサメビタキ、サンコウチョウ、ウソなどが確認された。以

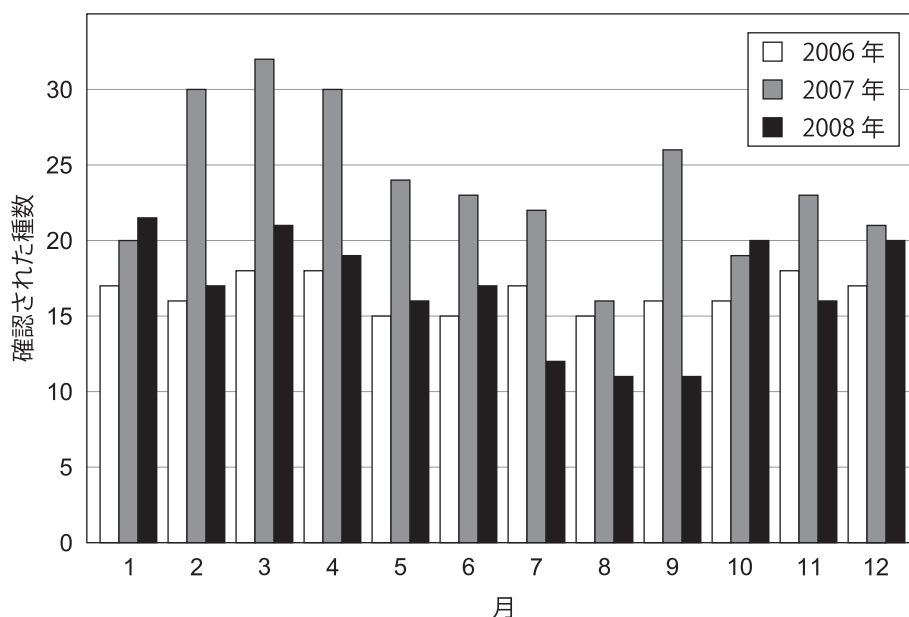


図 3. 2006 年から 2008 年において弘法山公園で確認された鳥類の月別の変化.

上の結果より、本調査地である弘法山公園は、渡り区分や生息環境の異なる多様な種が定着または一時的に利用していることが明らかになった。

しかしながら、本調査は、3 年間の短期的な調査であり、また各年における調査回数も若干変化したため、鳥類相や季節消長において不明な点も多く存在した。溝部ほか（1995）では、藤沢市の川名緑地において 12 年間の長期的な鳥類調査を実施し、鳥類相に加えて、各種の増減までのデータを得ている。このような長期的なモニタリングは、地域の鳥類相の変化や個体群の動態を捉えることができるために、鳥類の保全において大変重要な調査といえる。弘法山公園においても、本調査で明らかになった多様な鳥類相の保全のために、今後の長期的なモニタリングが必要である。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、神奈川大学理学部（前 平塚市博物館館長）浜口哲一教授には、著者らが撮影した写真に関して助言をいただいた。また、投稿にあたり、編集委員会および査読者の方々には、論文構成に関する助言や文献情報の提供を含め大変お世話になった。ここに感謝の意を表する。

引用文献

浜口哲一, 1996. 平塚市土屋地域の鳥類相. 平塚博物館研究報告「自然と文化」, (19): 53-62.

環境省, 2009. 外来生物法. Online. Available from internet: <http://www.env.go.jp/nature/intro/index.html> (downloaded on 2009-10-27)

叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄, 1998. 山溪ハンディ図鑑 7 日本の野鳥. 623pp. 山と溪谷社, 東京.

加藤ゆき・浜口哲一・平田寛重・石井 隆・秋山幸也, 2006. 鳥類. 高桑正敏・勝山輝男・木場英久（編）, 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006, pp.233-264. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.

川上和人, 2002. ガビチョウ. 村上興正・鷺谷いづみ監修, 外来種ハンドブック, p.87. 地人書館, 東京.

Kawakami, K. & Y. Yamaguchi, 2004. The spread of the introduced melodious laughing trush *Garrulax canorus* in Japan. *Ornithological Science*, 3: 13-21.

久良岐探鳥グループ, 1994. 1992 年に横浜市港南区久良岐公園で観察された野鳥. *BINOS*, (1): 59-67.

溝部泰子・藤山素子・小野瀬一巳, 1995. 藤沢市川名緑地周辺における鳥類相の変化—12 年間の探鳥会の記録から—. *BINOS*, (2): 25-41.

日本鳥学会, 2000. 日本鳥類目録改訂 第 6 版. 345pp. 日本鳥学会, 帯広.

日本野鳥の会神奈川支部, 2007. 神奈川の鳥 2001-05—神奈川県鳥類目録 V—, p.142. 日本野鳥の会神奈川支部, 横浜.

竹内 裕, 1997. 愛川町八菅山で記録された鳥類 2. *BINOS*, (4): 31-39.

吉田裕樹・石川康裕・佐藤友哉・馬場好一郎・藤吉正明: 東海大学教養学部人間環境学科自然環境課程